

積雪深と今後の作業について

1 本年の積雪深

本年の 3 月 20 日の積雪深は図 1 のとおりとなっています。

3 月 21～22 日の降雪により積雪深は増加していますが、昨年・一昨年よりは少ない状況です。

過年度の融雪期から類推すると、融雪材を散布しているほ場では、4 月上旬に融雪期を迎えるでしょう。

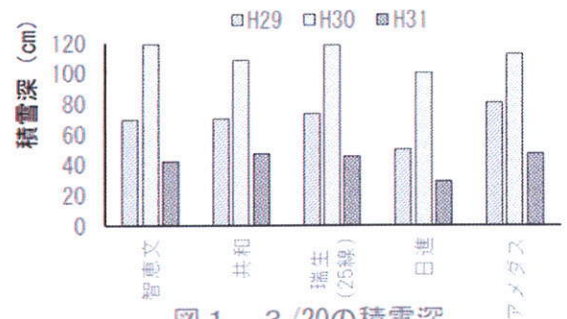


図 1 3/20の積雪深

* アメダスは名寄アメダス

2 長期予報（札幌管区气象台）

（3月14日発表 抜粋）

平均気温予報は図 2 の通りです。

6 月～8 月が平年並みか低い予報なので、早期は種・定植を行い、低温が来る前までに 生育量を確保しておく重要性が高いです。

	H29年	H30年	H31年
融雪日	4月5日	4月18日	

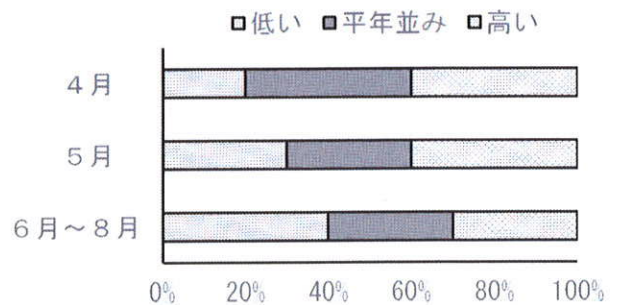


図 2 予想される気温

3 水稻の本田作業について

昨年は、畦からの漏水が収量・品質に及ぼした影響がありました。

本年は、融雪が早く、「畦塗り」のチャンスです。

また、砕土を細かくする事により、ほ場の均平になり、代かき回数を少なくなるほ場も多くなります。

耕起はゆっくり行いましょう。

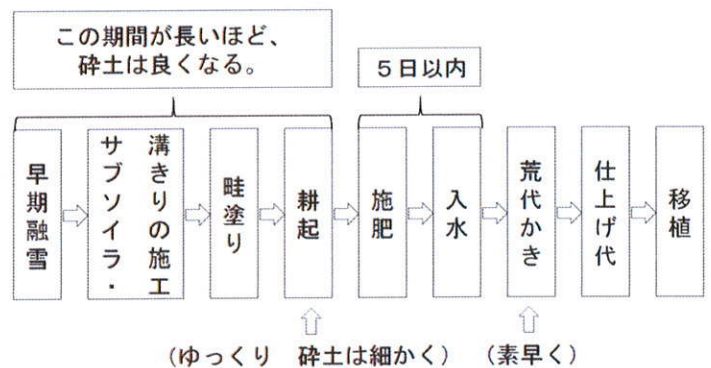


図 3 水稻の移植までの作業工程

4 水稻のケイ酸の重要性について

図4は昨年(平成30年)の泥炭土でのケイカル施用量と収量・品質を示したものです。

ケイカル施用量が多いほど、収量・品質が向上しています。

施肥窒素量は、13.2~13.6kg/10aです。

低温年はケイ酸の施用効果が高くなります。

また、全ての土壌で、ほ場の乾きが悪いと利用率が低くなるため、乾田よりも必要量が60kg/10a多くなります。

図3の作業体系を参考に乾田化を進めてください。

ケイ酸の不足分は、施肥時に加えてください。

泥炭土での施肥窒素量は10kg/10aが上限で、それ以上増肥しても収量は変わらず、品質が低下します。

適正施肥窒素量のほ場を設けて比較してみましょう。

5 畑作における作業について

①ほ場周囲の融雪促進

ほ場外周や路肩では融雪が遅れることが多いため、残雪の状況に応じて、融雪材を追加散布して下さい。

②融雪水の排水促進

融雪後は、「溝切り」や額縁明渠等により表面排水を行い、ほ場の乾燥を早めましょう。

③秋まき小麦に対する「雪上追肥」について

水田転換ほ場で、起生期の追肥が遅れる場合の対応として、雪上から追肥を行う「雪上追肥」という方法があります。

図5は、秋まき小麦で「雪上追肥」と通常の起生期追肥を行った場合の収量比を表しています。

横軸が積雪深を表し、積雪深が40cm以下になると、起生期と同等の収量を確保することが可能になります。

実施する場合は、硫安等で起生期と同量をブロキャス等で散布して下さい。

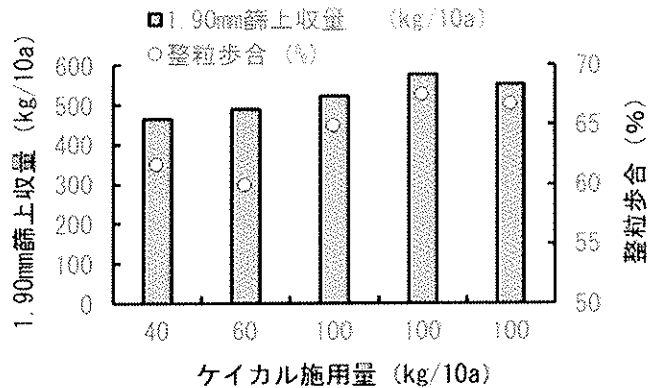


図4 泥炭土でのケイカル施用量と収量・品質の関係
H30年 品種：はくちょうもち

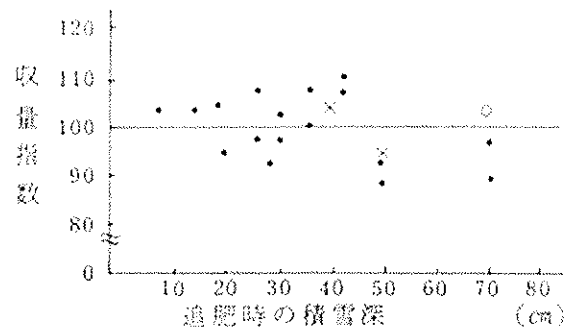


図5 「雪上追肥」による積雪深と追肥の効果
(「昭和56年道指導参考」より)